

小 櫛

中村嘉津

姉上のつげの小櫛かひいやりと、素足にふれぬ  
春の椽側

汽車の中われに隣れるよき人の、櫛の光りに心  
おさるゝ

たんぼゝの實ぞふはくゝと風に飛ぶ、悲しや春  
も暮れてゆくめり

母あらばこの悲しみを告ぐべきに、若草の野に  
來てはわが泣く

夏ちかみ沼べに生ふる青芹の根をひたすまで水  
まさりけり

さみごりの一葉くゝに日をうけて、そよめき立  
てり初夏の木々

木々の葉のみごりの上にあざやけく、ニコライ  
の塔をみるあしたかな

くゝとなく蛙のこえにやゝしばし、青沼のへに  
たゝすむ夕

夕ぐれの池に蛙のこゑしげし、明日は雨らし月  
のくもれる

水のごと心すみたる君なれば、わが近づくは惜  
しかりされど

ゆふべゝ窓によりては聲ひくう、神をたゝへ  
て歌うたふ君

つらき事悲しきこともさりげなく、ほゝゑみみ  
する君の尊とさ

一日だにわれにもあれや君のごと、尊き心安け  
き心

つひにわれ歌に親しむ性ならず、かく思ひつゝ  
なほも筆とる

おりつくす所はしらすひたすらに、けはしき坂  
をただはしるわれ

黙

中山八千代

ことさらに黙して三年ありしかばそが安らげく  
なりて來しかな

われとわが心の窓に戸をさして多くの人は交は  
らぬかな

ことさらにもたしてあればよく云ふが我の性と  
は人の知らなく

いつはらす眞の我を人みなの前に見せんとおも  
ひてあれど

ともすれば憂もなげによく笑ひ我をいつはる心  
かなしも

これもまた人の心にさからはぬてだてと我をい  
つはりてをり

この日頃われいつはるに馴れにけりかく思ふ時  
涙ながるる

つゝましくかざりてをれとともすれば眞の我の  
きらめきて出づ

我を知る人に對ひてある心地雑木林にひとりす  
われは

もだしたる林の中に我もまたもだしてあれば心  
安かり

生ひ出でてそのままそこに伸びて行く木を羨み  
ぬ旅にある子は

その若き我に似たれば木木の芽を生命のごとく  
なつかしむかな

たた一人泣かんとて來し松林こゝにも人の往き  
かひてをり

いらたゝしき心に見やる海原に大浪たたす物た  
らぬかな

忘れ得ぬ事おほかりきかくとのみ書きとどめた  
る今日の日記かな

今日もまた昨日のごとく過すらし髪のかたちの  
つゆもたかはぬ

わか髪の思ふがまゝに結はれしに心たらひぬ初  
夏の朝

櫛の齒のあとありゝと前髪に見ゆるうれしき  
湯上りのあと

何となく落ちぬ心地うつくしき櫛をさしぬと  
いふことに

あたらしくペンとりかへし書き心地あらぬ人に  
も文かきて見つ

月白う櫻こぼるゝ春の夜は秘めたる夢もかたら  
まほしき

湯上りのすかくしさにうかれ來て飴細工など  
買ひし縁日

いさゝかのの足袋のよごれのそれにだにしづ心  
なきこの日ころかな

坂道をくだる車のこゝちにて過こしがたなき我  
れの一生

水 鳥 横井まきの

水鳥と我ひとりどがはてしなきみ空のもとにも  
だしあふかな

相もたし互互の思ひ出をたとりてあれは蛙なき  
いづ

浪の音と太陽の光とにむかひる我的小さゝか  
なしいかなや

三保がさき清水に通ふ出で舟を待つま淋しき旅  
の夕暮 (以上三保にて)

山そひの村に煙の立ち初めぬまた力なき生がは  
じまる

ほかゝと春の光の吸はれゆくさ青の草のゆた  
けきふくらみ

二百里をへたてゝ母を慕ふ子が夕々にあけて見  
る窓

ひるの雨に少し濁れる川の水おほる月夜にうす  
光する

亡き人のくしげに残る櫛のはにからみ合ひたる  
毛すじ悲しも

惜しげなく櫛をボキリと折り捨てぬ髪のもつれ  
の悲しうなりて

わけもなく腹立たしうて折りし櫛またつきて見  
る悲しき心

髪 安吉ます

風そよと若葉のかげにふき入れば洗ひ髪よりつ  
げの櫛おつ

女子を見れば忍ばる桃色の輪櫛をほしとおもひ  
たるころ